

『榻嶋暁筆』における鴨長明著作の受容の様相

— 『無名抄』と『発心集』の比較から —

小 椋 愛 子

一、はじめに

『榻嶋暁筆』が収める説話の記事の大部分は、何らかの出典を持つと推察される。これまで、『榻嶋暁筆』所収の説話の典拠を探り、受容と変容のあり方を考察してきた。説話の出典は、記される場合と記されない場合とがあるが、全体として仏典や漢籍では比較的、言及が多く見られ、和書では少ない傾向にある。その中で、『無名抄』を典拠とするものは、書名に対する言及はないが、著者である「鴨長明」の名を記す場合がある。たとえば「鴨長明も……と書たりける」などで、そこから典拠を推測することができる。『榻嶋暁筆』全体でも一話全体の著者名を挙げているのは珍しいが、さらにこのような現象は、同じ「長明」の作である『発心集』を撰取する場合にも見受けられる。

前稿¹⁾では、『無名抄』の記事に注目し、『無名抄』の撰取が集中している巻三を中心に、その撰取と受容のあり方を考察した。そして、『無名抄』の撰取の様態が四つに分類できること、一話の中で占める『無名抄』の撰取の分量と著者の明記に、相関関係があることを指摘した。たとえば、『無名抄』の一段を『榻嶋暁筆』の一話として利用しているもの²⁾には、「長明」の名は記さず、「一話の大部分を『無名抄』以外の書に依拠する中で、その一部分に『無名抄』の記事を組み込むとき」や、

「『無名抄』を撰取する中に、他書からの引用を挿入する場合」には、「長明」の名を記し、『無名抄』から引用した箇所が他と厳密に区別できるように明示されていた。また、『無名抄』から撰取する場合には、『無名抄』の一段を基準として引き、話の展開をむやみに変容させないという明確な意図が見られた。このような撰取の姿勢は、卷三の構想にも影響を与えていた。つまり、『無名抄』から「勝劣論」の二項対立の内容を、もとの一段の枠組みを崩さずに撰取する方法が契機となり、『無名抄』を引くまでは「二者」を主人公とした説話を配していたものが、それ以後は「二者」を並べる説話となるなど、配される説話の内容に変化がみられた。これは、意図していたか否かは不明だが、巻の主題よりも『無名抄』の内容を変容させずに引くことを優先した結果と考えられる。「長明」の名の明記と合わせて、「長明」を重視していた表れともいえるよう。

これらをふまえて、本稿では、同じ「長明」の著作である『発心集』の撰取の方法を検討し、『無名抄』の撰取の姿勢と比較しながら『榻嶋暁筆』作者の長明像を考察する。また、これまで『榻嶋暁筆』作者が依拠する書物によって撰取する内容や方法を変え、用途に合わせて資料を使い分けていることを指摘してきたが、同一作者の著作の場合でもそれがあてはまるのか、あわせて考察していく。

なお、『榻嶋暁筆』の本文は、市古貞次氏校注『榻嶋暁筆』（中世の文学・三弥井書店、底本は国会図書館本）を使用した。以下、これを「中世の文学本」と称する。

二、『発心集』からの撰取の箇所とその受容の様相

『発心集』（以下、『発』とする）との比較を行うにあたって、先に『発』を撰取している箇所を「中世の文学本」の頭注の指摘に従い、表にまとめた。その中には、指摘されていないが、『発』とともに『三国伝記』を引いたと思わせるもの

がある。これについては、後述するが、*印を付し、表外に指摘しておく。『発』の引用は、『方丈記 発心集』（新潮日本古典集成、底本は慶安四年版本）に拠り、適宜、神宮文庫本を参照した。

【表1】『発心集』を撰取する箇所

通し番号	『榻嶋暁筆』の巻と表題	話番号と表題	『発心集』の該当箇所
①	巻十一・知識	「成信重家高光」 ²⁾	巻五・第九「成信・重家、同時に出家する事」* 巻四・第五「肥州の僧、妻、魔と為る事 悪縁を恐るべき事」（『私聚百因縁集』九・二十一「肥州僧妻為魔事」も同じと頭注にある）
②	巻十三・怨念	五「肥後国女」	頭注で『三国伝記』巻三・第二十一「老尼死後橘ノ虫ト成事」を挙げ、『発心集』巻八・第八「老尼、死の後、橘の虫となる事」に同話があるとする。
③	巻十三・怨念	十「橘虫」	巻一・第八「佐国、華を愛し、蝶となる事」 ^付 六波羅密寺幸仙、橘木を愛する事
④	巻十三・怨念	十三「講仙法師」	この類話として『拾遺往生伝』中「六波羅密寺講仙」を挙げる。さらに、『沙石集』巻八・第十三も挙げる。
⑤	巻十三・怨念	二十「死女本結」	巻五・第四「亡妻現身、夫の家に帰り来たる事」

* 高光の箇所は『三国伝記』巻十・第二十四「高光少将遁世往生事」に依拠すると思われる。

これらを『榻嶋暁筆』（以下、『暁筆』とする）と比較すると、撰取の仕方から次のような三つの様態に分類できる。

- 1、『発』のみに依拠するもの
- 2、構想は『沙石集』の一話に拠るが、その詳細を『発』に求めているもの
- 3、『発』に依拠しながら、部分的に『三国伝記』の関連話を添加し、より詳細な内容にしているもの

さらに、この中で、長明の名を記す場合と記さない場合とがある。

次に、それぞれについて検討していくが、『発』を典拠とする説話については、一部を拙稿で取り上げたこともあるため、内容が重複するものがあることをことわっておく。以下、引用部分の傍線は、筆者が私に付した。

1、『発』のみに依拠する例

これは、『表一』の⑤卷十三（怨念）第二十「死女本結」が該当し、「長明」の名を記している例である。頭注に指摘がある『発』卷五・第四「亡妻現身、夫の家に帰り来たる事」が典拠と推察される。比較すると、『暁筆』は一話の展開は『発』に従い、『発』を要約する形で撰取していることが分かる。これは、妻を亡くして悲しんでいた男のもとに、亡妻が夜、訪ねて来たという話である。男は夢かと思ったが、妻が落としていった「元ゆひ」は、臨終の際に妻の髪を結いつけた反故の破れであったという。さらに、その類話として、小野篁の妹の例を付し、「大方志の深により、不思議をあらはす事、か、りけるにや」と総括して本文を終えている。これは、『発』の総括部分「大方、こころざし深くなるによりて不思議をあらはす事、これらにて知りぬべし」を、末尾の表現のみを変えてそのまま取ったもの。『発』ではこれに続けて、凡夫の思慕でさえこのような「不思議なこと」がおこるとして、仏菩薩を思慕する重要性やすすめを説き、末尾でこの話を「仏法に値遇し奉らんと願はば、なじかは、かげろふの契りにことならん。たとひ業に引かれて、思はぬ道に入るとも、折り折りに必ずあらはれて救ひ給ふべし」と評している。『暁筆』は、この「評」部分は取らず、小野篁の妹の例までの、いわゆる説話部分を中心に取る。これは、「怨念」の主題を持つ卷十三に本話を収録するため、この話を『発』の解釈と同じく「不思議なこと」と捉えるが、帰着点を異にしているのである。そうではあるが、小野篁の妹の例の直前にある『発』の

「これは、近き世の不思議なり。更にうきたる事にあらず」とて、澄憲法師の人に語られ侍りしなり。

の表現も、

これを世の不思議なりと、澄憲法印（「印」）諸本は「師」の語られけるとて、鴨長明書置ける。（『暁筆』）

と「長明」の名を添加して、長明が引く澄憲の解釈をそのまま記す。ここに、名を付し、「書置ける」と強調することは、長明が記した内容（「長明が妥当と判断したもの」であれば、信頼できるとする『暁筆』作者の思いの表れといえよう）。

このように、一話の展開も『発』に沿い、典拠を忠実に引く姿勢から、『発』への敬意が窺える。『暁筆』では、本文の後に別記文を付し、「元ゆひ」が残っていたことに対して「今云、限なりし時、髪ゆひたりし本ゆひとは、かれが死してのち、髪をばそらざりけるにや。又ほうぐにてもとゆひをしたりけんもいかゞ、いぶかし」と疑問を呈するが、それに続けて「しかはあれど、澄憲のかたられ、長明が書置ける上は、うたがふべからずや」と結論づける。典拠を忠実に引く姿勢とあわせて、「長明」が収集した話材に対する信憑性の高さが窺える。また、ここでは「長明」の名の記載に、『無名抄』のような引用箇所を分けるという働きは見られない。

2、構想は『沙石集』の一話に拠るが、その詳細を『発』に求めている例

これは、【表1】の④巻十三（怨念）第十三「講仙法師」が該当する。これは、僧の「講仙」が橘の木を愛し、それに執心したために死後、蛇になりその木の元に住んだという話である。【表1】で記したように、頭注に『発』によるとの指

摘があり、さらに『拾遺往生伝』や『沙石集』に関する注記もある。「講仙」の記事は、『法華験記』や『拾遺往生伝』、『今昔物語集』などの書にも散見されるが、この話は、一話の分量、表現から、『発』巻一・第八「佐国、華を愛し、蝶となる事」^付六波羅寺幸仙、橘木を愛する事」によると推察できる。但し、この第十三「講仙法師」は、この前々話（第十一「柿木文字」）、前話（第十二「笋虫」）の典拠とおぼしき、慶長十年刊古活字本『沙石集』巻八・第十三「執心之堅固由仏法臈（蕩）事」が源であろう。『暁筆』では、卷十三の第十一、第十二、第十三話は、それぞれが独立した説話となっているが、『沙石集』では、巻八「執心之堅固由仏法臈（蕩）事」に『暁筆』の三話に該当する記事が執心の例として同じ順で配されているから、『暁筆』の三話の配列はそれに拠ったと考えられる。しかし、この「講仙法師」の話は、『沙石集』では僧の名を記さず、「昔毛橘ノ木ヲ愛シテ蛇ト成テマトヒケル事アリ」の記述のみである。『暁筆』も一話の分量は少ない（次に一話全てを挙げる）が、

中昔東山六波羅寺に講仙と云僧有ける。年来道心深かりけるが、前栽に橘の木を植へて愛しける。聊の執心により身をかへて蛇に成、彼木の本に住けるとぞ。

と、寺名や僧の名を説明している。これは、『発』の

又、六波羅寺の住僧幸仙と云ひける者は、年来道心深かりけるが、橘の木を愛し、いささか彼の執心によりて、くちなはと成つて、彼木の下にぞ住みける。委くは伝にあり。

の記述と、表現が類似し、さらに説明の順も同じため、ここは『発』に拠るといえよう。そうであるならば、第十一話か

らの配列は、『沙石集』の一話に拠り、より詳細な情報を『発』に求めた例といえる。他の説話集に依拠した話材を『発』に置換しており、⁸⁾『暁筆』作者が『発』を高く評価し、熟読していたことが窺える例である。

3、『発』に依拠しながら、部分的に『三国伝記』の関連話を添加し、より詳細な内容にしている例

これは、『表上』の①『暁筆』卷十一（知識）「成信重家高光」、②『暁筆』卷十三（怨念）第五「肥後国女」が該当する。さらに、少し例外的ではあるが③卷十三（怨念）第十「橘虫」についても、ここで取り扱うこととする。①から順に見ていく。①は、一話の展開は『発』に拠るが、その一部の詳細な内容を『三国伝記』（以下、『三国』とする）に求め、添加する例である。この「成信重家高光」は、源成信、藤原重家、藤原高光の三人の出家譚（成信と重家は同日に出家）を中心とした一話である。この三人の譚を別記文で「これらの人々はあながち誰す、むるとはなけれども、……菩提の心を発し給へり。是又善知識とも申侍るべし。（以下、統）」と巻の主題である⁹⁾「知識」に合わせて、「善知識」で評したあと、さらに本文を続けて、この別記文に関連した譚を加えて一話を形成している。話の核である、三人の出家譚が『発』に拠る箇所である。この成信、重家が同日出家した記事は、『権記』や『日本紀略』に見え、また『拾遺和歌集』等の勅撰集でも、これにまつわる歌を所収する。このことから、当時は話題であったことが窺えるが、以後『今鏡』、『宝物集』、『続古事談』、『愚管抄』、『百練抄』など『発』以外の書にも、数多く散見される。

しかし、成信、重家の同日出家の説話に、高光の話を加えて一話を構成しているのは『発』のみであること、成信と重家の出家の動機が一致することから、『発』卷五・第九「成信・重家、同時に出家する事」に依拠しているのは明らかである。まずは、『発』の梗概を確認しておく。⁹⁾

①成信と重家は照る中将、光る少将とよばれ、類いなき公達であった。

② 成信と重家のそれぞれの発心の起り。

③ 二人が出家の日を定め、慶祚阿闍梨のもとで落ち合う約束をする。

④ 重家が遅れたため、成信が先に慶祚のもと（房）に出向き、諭されるが、自ら髪を切り、出家をする。

⑤ 晧近くに重家が来る。父への暇乞いで遅れたが、日を違えないため「元結ひ」を切つて来たことを話して同じく出家する。

⑥ そのとき成信は二十三歳、重家は二十五歳であった。

⑦ 慶祚阿闍梨は、惜しみながらも、一方では尊いことだと受け止めた。

⑧ 重家の父は、暇乞いの際、気配を察したが、止められなかったという。

⑨ 藤原高光の出家の譚。

両者を比較すると、『晧筆』は『発』の展開順に従いながら、表現までも撰取していることがわかる。但し、簡略化したり、より詳細に添加したりと差異も見られる。まず、簡略化している箇所は、『発』の梗概③④⑤の出家時の慶祚阿闍梨との詳細な問答、重家の遅れや経緯である。『晧筆』は、二人がともに出家したという骨子のみを簡潔に述べる。但し、「みどりのもとどおりおし切て」と、『発』で二人が自発的に「髪」や「元結ひ」を切つたことを反映させるような記述である。「中将は廿三、少将は廿五」と梗概⑥はそのまま取り、続く梗概⑦⑧を「彼人々の御父母上の御事は申に及ず、しるもしらぬも聞人あはれといはぬ者ぞなき」と哀しむ各々の様子や思いを省略し、その報を知った皆が哀しんだことを総括して記す。このように、出家の際の様子は簡潔にまとめるが、梗概②の「発心の起り」は忠実に撰取する。出家の行為より「発心の契機」に重きを置いて撰取していることから、『晧筆』作者が『発』という作品の特性を十分に理解していたことが窺える。

要約の傾向がある一方で、『発』に添加して、より詳細にしている箇所もある。それは三箇所あり、第一は、出家の事実

のみを記した箇所、出家の日にち「長保三年三月二日」を添加する。第二は梗概⑧の直後で「公任大納言」の和歌を挿入する。第三は梗概⑨の箇所、高光の修行の様子などを添加する。最も加筆の大きい箇所が、この第三の箇所である。順に挙げる。

第一の日にちについて、『暁筆』は「長保三年三月二日」とするが、『権記』や『愚管抄』によれば、「長保三年二月三日」(『日本紀略』は二月四日)である。『暁筆』諸本でも「三月二日」となっているが、これは、月と日を逆にした誤りと考えられる。第二は、『発』梗概⑦⑧を前掲のように簡略に述べ、それに続けて、

されば公任大納言、此事を聞て大納言行成のかたに一首をつかはされける。

おもひしる人も有ける世中をいつとてすぐすなるらん

此歌は拾遺并後拾遺に入侍り。

と、公任が行成に贈った和歌を挙げる。この歌は『公任集』にもあり、本文でいうように『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』に収録される(但し、『公任集』では、三句目を「世中に」とする)。これは「しるもしらぬも聞人あはれといはぬ者ぞなき」の関連としてその強調としての添加で、『発』の一話の枠組みは変えずに元の話を詳細にする。第三の高光の譚は、添加の最も大きい箇所注目すべき箇所といえる。但し、ここも『発』の内容を全て変えてしまおうのではなく、『発』をもとに、新たな情報を付加している。付加した箇所は、「中世の文学本」に指摘はないが、表現がほぼ一致することから『三國』巻十・第二十四「高光少将遁世往生事」が典拠と思われることをここで指摘しておく。次に『発』、『三國』、『暁筆』の順に三書の該当箇所を対照して挙げる。「囲み部分」は、それぞれに差異がみられるところ、「網がけ」の部分は、『暁筆』が撰取しない箇所である。さらに、『暁筆』の二重傍線部分は『発』から撰取している箇所、点線部分は『三國』に拠っている箇所

である。

又、多武峯の入道高光少将は、兄の一条の摂政の、事にふれつつあやまり多くおはしけるを見給ひて、「世にあるは恥がましき事にこそ」とて、これより心を発し給ひけるとなむ。人のかしこきにつけても、愚かなるにつけても、実の道を願ふたよりとなりにけんこそ、げにあらまほしく侍れ。

(一発)

和云、村上天皇御宇、高光少将申シハ、九条右丞相師輔第八ノ息、御母ハ延喜ノ帝ノ姫宮雅子ノ内親王ニテ、時ノ御門には御孫ニテゾ坐シケル。其ノ上才芸越世に、朝家之賞モ由々敷侍ケル。然レドモ此ノ世ノ無コトヲ慕悟リ、堅固ノ道心発ケルニヤ、

角計経ガタク見ユル世ノ中ニ浦山敷モ清ル月哉

ト詠ジテ、応和元年十二月五日ニ立出テ、比叡山横川ノ辺リニ年来知タル貴キ聖有ケルヲ尋行、出家シテ、法名ヲ如覚ト申ケル。後ニ(ハ)大和国多武峯ニ住シテ修行シ玉ケルニ、柴菴隙疎カニシテ香煙ニ霧自ラ類シ、松戸扇緩クシテ懺悔ノ風頻リニ扇グ。巖畔ノ花ハ匂ヒ幽ニシテ不レ同後園ノ昔ノ色ニ、深洞ノ月ハ影澄テ永ク異ニ槐門ノ暁ノ光ニ。

(以下続、『三国』)

又少将高光と申侍は、九条右丞相師輔公の第八の御息、御母は延喜帝の姫君雅子内親王にておはします。帝の御孫にてわたらせ給ふ上、才芸も世にこへ、朝家の御おぼえもゆゝしかりしかども、世をうき物とおもひとり、堅固の道心を、おこし給ふなり。

かくばかりへがたく見ゆる世の中に浦山しくもすめる月かな

と詠じ、応和元年十二月五日叡山の横川に至り、遂に出家し如覚とぞ申ける。其発心のおこりをとへば、御このかみ
一条摂政太政大臣^{伊尹公}、事にふれつつあやまりおほくおはしけるを見給ひて、世にあれば恥がましき事にこそあひけれ
とて、是より心を発し給ひけるとなん。後には大和国多武峯にすみ修行し給ひけるに、柴庵の事〔事〕諸本「ひま
疎にして香煙に霧を顕し、松戸に軒まばらにして懺悔の嵐しきりに、岩畔の花は苟かすかにして後遠の昔の色におな
じがらす。深洞の月は影明らかにして槐門の暁の光をあらはす。誠に貴き聖人なり。
〔暁筆〕

このように、『暁筆』は『発』からは、高光の「発心の起こり」を取り、『三国』からは、高光の心情を表した和歌、出
家の日付を取る。『三国』から撰取している箇所にも、漠然とした高光の「道心の起こり」は描かれるが、『暁筆』は再度「其
発心のおこりをとへば」と強調して、『発』から「発心の起こり」を改めて取る。これは、前述したが『発』の特徴である「発
心の契機」を生かした撰取で、『暁筆』作者が『発』という作品をよく理解していたことが窺える。さらに、『発』の一話
の展開の順、三人の発心の契機をそれぞれ挙げるという構成は崩していないため、『発』を信頼してそれに拠っていること
は明らかであろう。

ここで、この話の末尾の解釈に着目すると、『発』は前掲の網がけの部分、「人のかしこきにつけても、愚かなるにつけ
ても、実の道を願ふたよりとなりにけんこそ、げにあらまほしく侍れ」と、人の行いが、賢いずれにせよ、仏道を願う
契機となればよいというまとめである。それに対し、『暁筆』は、「誠に貴き聖人なり」と、高光個人の評で終わる。これは、『
三国』から引いた直前までの高光個人の崇高さを述べた内容の影響を受けたためであろうか。しかし、『暁筆』は、この
直後の別記文では、前掲したが「これらの人々はあながち誰す、むるとはなけれども、事にふれ、又はよの有様を見て菩
提の心を発し給へり。是又善知識とも申侍るべし。(以下、続)」と、巻の表題に合うように「善知識」で総括する。『発』
とも帰着点は異なるが、一話全体の解釈は、三人を並べる構成からしても『発』に近いといえようか。

続いて、【表1】の②『晁筆』卷十三（怨念）第五「肥後国女」を見ていく。これは、清らかであった僧が妻帯したが、臨終の際には妻を一切近づけず、見事に往生をした話である。僧の往生を知った妻は、狗留孫仏の時から菩提を妨げるためにそばに居続けたが、取り逃がしたとして悔しがったという。本文に「……長明は書けり」とあるように、また、頭に指摘があるとおおり、これは、『発』卷四・第五「肥州の僧、妻、魔と為る事 悪縁を恐るべき事」が典拠と考えられる。比較すると、『晁筆』は『発』の展開に従い、会話文まで忠実に全体を要約しながら撰取している。『発』の説話部分の末尾にある「往生伝には、康平の比と註せり」の一文を、『晁筆』も「往生伝には康平の比としるせりと長明は書けり」と、長明の名を付加して記す。『晁筆』の本文はここまでだが、この話には別記文がある。別記文では、『発』の「評」部分を中心に引く。しかし、別記文の冒頭は「三国伝記には信州に善阿弥といふ者あり。其妻終に青鬼となりて、天へあがりて失にけりと書たり。両伝すこしかはりたるやうなれども同じく哉」と、『三国』にある類話の言及から始まる。この『三国』の該当話は、『三国』卷二・第二十七「信濃国遁世者往生事説 魔障妨也」で、『発』と主旨は類似するが、『発』では、話の場所が「肥後の国」、妻は一般人（「尼」との記載なし）、『三国』では「信州」、妻は「尼公」などの違いがあり、さらに往生の際の様子など、複数の違いが見られる。しかし、『晁筆』作者は同類話と見なしたためか、本文に『三国』からほぼ同文の一文を引く。それが、妻帯後の僧の様子を描く箇所で、

ふるき枕の上には偕老の契約よりふかく、昏の衾の下には同穴の昵言こまやかなり。（『晁筆』）

と、成語的な表現¹⁴⁾である。これは『発』にはなく、『晁』は

かかれど、なほ後世の事を思ひ放たず。理観を心にかけてつづ、その勤めの為に別に屋を作りて、かしこを観念の所と

定めて、年比つとめ行ひけり。

と、妻帯しても僧が修行をしていたことを記す。⁽¹⁵⁾

『暁筆』が、『三国』から引く一文は、妻との仲の良さを強調するため、次の場面の、僧が妻に病を隠し、知り合いの僧に臨終の際にも妻に知らせないように頼むという行動の意外性を際立たせる。男の往生の場面を『三国』は、妻が離れなため、葉を取りに行かせるようにすることや、それに続く往生の際の具体的な様子まで記す。しかし、『暁筆』作者はその話を知っているながらも撰取せず、『発』に依拠する。『発』と『三国』の説話を同類話かとしながらも、概要は『発』から撰取していることに注目したい。

最後に、『表上』の③巻十三(怨念)第十「橘虫」の例を挙げておく。⁽¹⁶⁾これは、老尼が病が重くなつた際に、隣の僧の家の橘を所望したが、拒まれたため、死後、橘を食う虫となつて隣の主を困らせた話で、『発』(巻八・第八)と『三国』(巻三・第二十一)に同類話がある。ここでは、冒頭部分のみを挙げて比較する。

近比、ある僧の家に、大きな橘の木ありけり。実の多くなるのみにあらず、其の味も心ことなりければ、主の僧また、たくひなき物になむ思へりける。⁽¹⁷⁾

和云、中比、幡摩国⁽¹⁸⁾或ル僧ノ住ミケル軒端ノ前栽ニ橘ノ木アリ。葉サカヘ花サカヘ盛リテ実ノ多クナルノミナラズ其ノ味モ濃ナリケレバ、主ノ僧タグイナキ物ニ思テ秘藏スル事無シ極リ。⁽¹⁹⁾

中比幡磨国⁽²⁰⁾に、或僧の住ける軒端の前栽に橘の木あり。花さへさかりに実のなるのみならず、其味さへ濃也。あるじ類なき事におもひ、秘藏する事斜ならず。⁽²¹⁾

このように、『暁筆』は『三国』をほぼ同文で引く。『発』では国名も記さないから、『三国』に拠ることは明白といえよう。しかし、この『三国』の話の原拠は『発』と推察される。前の例でみたように『暁筆』作者は、『発』と『三国』で大きく内容に違いがある場合は、『発』を中心にしながら論じている。このことから『暁筆』作者が『発』と『三国』を対照させていることが窺える。本話は、概要を同じくしながら、『三国』の方が『発』より詳細な説話になっているため、『三国』に拠ったのであろうか。

以上、『発』の受容の様態を検討した。次に、『無名抄』との摂取の違いをまとめておきたい。

三、『発』からの摂取の特徴と『無名抄』との比較

前章では、『暁筆』が典拠である『発』をどのように摂取しているか、その様態を検討した。その結果、『暁筆』作者は話材を収集する上で、『発』を信頼できる書として評価していた。それは、『発』の特性を生かして摂取していること、『沙石集』に依拠する話の詳細を『発』に求めていること、『発』から摂取した箇所到他書からの内容を添加する場合も、基本的には『発』の一話の構成を大きく崩さずに引いていることなどから推察できる。また、『発』からは、一話中の「評」の箇所より、「説話」部分を中心に引く傾向がみられた。

『無名抄』からの摂取と比較すると、『無名抄』からは説話部分の摂取であっても、原則として一段を基本として引いていたが、『発』では、評の箇所を省略するなどそれが比較的、緩やかになる。

さらに、「長明」の名の明記に関しても両者で差異が見られた。本稿の冒頭で記したとおり、『無名抄』を摂取する場合の名の明記は、『無名抄』から引いた箇所を他と厳密に区別する働きを有していたため、規則性があつた。しかし、『発』からの場合にはそのような規則性はなく、『発』の本文「澄憲法師の人に語られ侍りしなり」、「往生伝には、康平の比と註

せり」の後に、名を添加し、それが長明の言説であることを明示することで、話材の情報源の確かさを強調していた。また、別記文の箇所では、本文の内容に疑問を呈しながらも「しかはあれど、澄憲のかたられ、長明が書置ける上は、うたがふべからずや」と、「長明」の名を論拠にして議論を終わらせる。「暁筆」作者が、長明が記したことであれば確かだということを持っていったこと、さらに、その当時の読者にもそれが共感されるであろうと判断していたことが推察される。このように、『暁筆』作者は、長明の名を、説話、例話の信憑性を高める証として明記している。

四、おわりに

以上、『発』を典拠としているものを検討し、『暁筆』がどのように『発』を撰取しているかを考察した。その結果、同じ著者の作品でも、『無名抄』と『発』では撰取の仕方に違いが見られた。また、『無名抄』からの撰取の場合には、長明の名の明記に規則性が見られたことから、『暁筆』作者が、『無名抄』は「説」として、『発』は話材を求めるものとして捉えていたことが推察される。『暁筆』作者の中で同じ人物の著作でも、作品によって求めるものの違いが明確に意識されていたといえよう。これは、その作品を熟読し、その特性を理解していたことを示している。『暁筆』作者の「長明」の作品への強い関心と、「長明」への敬意が窺える。¹⁸⁾

【注】

- (1) 拙稿『楊鳴暁筆』における『無名抄』撰取の特徴』（愛知淑徳大学国語国文』第四十一号・二〇一八年三月）
- (2) 卷十一には、話番号が付されていない。
- (3) 拙稿『楊鳴暁筆』の世界―（別記）の形式をめぐって―』（愛知淑徳大学国語国文』第二十五号・二〇〇二年三月）の四章、

- 拙稿「榻鳴暁筆」における『三国伝記』の位置（『愛知淑徳大学国語国文』第二十七号・二〇〇四年三月）の二章、三章。
- (4) 比較の詳細は、(注3)「『榻鳴暁筆』の世界―〈別記〉の形式をめぐって―」一二四～一二六頁参照。
- (5) 「暁筆」と「発」では、僧の名の漢字の表記が異なる。「講仙」と表記するものは、管見に入ったものの中では、『拾遺往生伝』と『今昔物語集』がある。しかし、『拾遺往生伝』の詳細な内容は見られず、内容や表現の類似から、ここは、『発』に拠ると考えられる。
- (6) 「中世の文学本」頭注に、第十一、第十二に關しても、『沙石集』巻八・第十三の指摘がある。
- (7) 引用は、『慶長十年古活字本 沙石集総索引・影印篇―』（勉誠社）所収の「慶長十年刊古活字十二行本」（東京大学文学部国語研究室蔵本）による。（話番号は付されていないが、私に数えた。）
- (8) 「発」では、「委くは伝にあり」の後に続けて「かやうに人に知らるるはまれなり。すべて、念々の妄執、一々に悪身を受くる事は、はたして疑ひなし。実に、恐れても恐るべき事なり」とこの話の評を付すが、その部分は取らない。説話部分のみを取っていることに注目したい。
- (9) 梗概は、浅見和彦・伊東玉美『新版 発心集』上（角川ソフィア文庫）をも参照した。
- (10) 「暁筆」全体として、冒頭で人物を挙げる場合は、その系譜を説明する傾向がある。そのため、成信の説明は「発」よりも詳細になる。但し、これは、『暁筆』全体に見られる傾向のため、三箇所には含まない。
- (11) 『拾遺和歌集』（新日本古典文学大系7・岩波書店、三九一頁に「重出」の旨の記載がある）。
- (12) 引用は、『三国伝記』下（中世の文学・三弥井書店）に拠る。
- (13) 比較の詳細は、(注3)「『榻鳴暁筆』の世界―〈別記〉の形式をめぐって―」一二二～一二四頁、「『榻鳴暁筆』における『三国伝記』の位置」三八～四〇頁参照。
- (14) 頭注に指摘はされていないが、本話の別記文の箇所では「鮑魚のいぢぐらに入、芝蘭の園に至るがごとし。（以下、統）」の成語的な表現が見られる。この表現は『三国』巻八・第二十六「齊宣王后無塩女事」に類似の表現があることを指摘しておく。（注13）参照。
- (15) ただし、次の病になった僧が妻にうちあけなかったとする場面では「此の妻、男の為此ころざし深く、事にふれてねんころ

なりけれど」とあり、暗に仲が良かったことを示す表現がみられる。

(16) 比較の詳細は、(注3)『榻嶋暁筆』における『三国伝記』の位置「四七〜四九頁参照。

(17) 引用は、『三国伝記』上(中世の文学・三弥井書店)に拠る。

(18) 『暁筆』の中で「長明」の名は、卷二十三(雑)「曹娥」に「彼紫式部が光源氏物語」、「清少納言が枕草子」と紫式部、清少納言と並べて「又鴨のながあきらが四季物語、あだにはかなき鳥けだもの、……さまぐにしたてつゝりなせる一部の始末、たゞよのつねの人のしわざとは見えざるにや」と見える。『四季物語』の作者が「長明」か否かの問題は別として、『四季物語』を「たゞよのつねの人のしわざとは見えざるにや」と評しており、「長明」への敬意と著作への興味が見て取れる。